

思考を深める学習活動の創造

授業はドラマだといわれる。ドラマの語源は、ギリシャ語の（drao）ドラオ「私に行く。私は苦闘する。」の意味に由来するらしい。授業のドラマは、子ども本来の活動（行い）がたつぷりと保障され、子ども自らが活動の主人公となることによって生まれる感動の体験である。われわれはこのような活動のドラマを期待した。それこそ没頭する活動の中から、自らの思考が躍動し、自らの主体が豊かにつくりだされるような学習過程である。学校の人間化が叫ばれ始めた今日、最も射た教育の課題と思われる。この活動に対する理論的省察と授業への位置づけが、本書の第一章で論及される。

ひるがえって、本校の研究の特色を歴史的に跡づけてみると、戦後の教育界をリードした総合生活学習の「久留米プラン」や「主体性」「創造性」「創造的学び方」そして「対話的思考」の鍵概念に象徴されるように、伝統的に脈々と「子ども主体」の教育活動を受けついで、今日の研究に至ったとあってよい。したがって昭和55年度来かかげてきたわれわれの研究主題「自己を豊かにつくり出す学習指導の創造」も、結局は「子ども主体の活動」の再発見に帰着するであろう。別の言葉で言えば、子どもたちの持ち味のきいた活動の実現である。

最近テレビなどのどぎつい刺激や情報、創意工夫のいらぬ受身文化の豊かさの中で、子どもたちの「小さな大人」が出はじめた。子どもらしい感動が失われてしまったと言われ、言わば子ども性喪失の時代だとみるむきもある。子どもは子どもとして熟成させることが、結局は立派な大人になる大切な礎であることは、発達の鉄則である。自らの考えを豊かにつくり出すためには、まずもって子どもらしい活動が存分に展開し、子どもの世界を開かねばならぬ。子どもたちの持味のきいた、子どもたちの手による、子どもたちの自らのための世界である。そのための学習指導上の手だてとして、次の三つの活動の側面から全教科にアプローチする基本構想を、第II章において具体的に論述している。

その第一の側面は、一昨年度の副題「対象へ生き生きと働きかける活動づくり」として公開してきた。子どもたちはもともと活動的である。学習指導の前提、「活動性の原理」などの諸原理が徹底的に生かされた方途の解明が、その年の課題であった。大体、活動的に外に働きかける力は、子どもの中に最も豊かに貯えられている。子ども自らの手で外界に生き生きと働きかけ、あるいは対象になりかわりして、どこまでも自分と結びつけて学習する活動を重視してきた。

第二の側面は、昨年度の副題「見直ししながら問いつづける活動」に焦点づけてきた。子どもはもともと、「追求性の原理」が生きる、創意工夫の存在である。しなやかに見直し、したたかに問い続ける子ども像の実現を目指してきたところである。

第三の側面は、本年度設定した課題「考えを発展的につくりかえていく活動」に対する働きかけである。

以上第II章における活動の三側面の理論的な解明を受けて、第III章では、各教科ごとの実際の授業例として具体的に展開し、実証的な吟味・検討を加えてきた。

まだまだ理論的にも実践的にも不備な点も多く、特にわれわれの究極なねらいである「その子らしさの活動」の実するためには、問題はむしろこれからといった段階でもある。先生方の一層の御鞭撻と御指導を切にお願い申し上げます。次第である。

本書の構成にあたっては、多くの方々のみなみならぬお力をいただいた。理論的な基調の上で、兵庫教育大学副学長・上寺久雄先生及び横浜国立大学講師・河津恭介先生に貴重な御教示を仰ぐことができたし、わけでも本学の中野和光助教授には、われわれの理論的支柱となっただき、熱心な御指導を賜った。そして前校長の畦森宣信教授をはじめ本学の多数の教官と本校職員の先輩の方々から懇切な御指導を授かった。また出版をご快諾下さった明治図書、特に編集部、江部満氏と樋口雅子氏に随分お世話になった。以上の皆様に対して、紙面をかりて改めて厚く御礼申し上げたい。

昭和57年3月
福岡教育大学附属久留米小学校 校長 林 昌三